

## チャリティー茶会に参加して (2018年5月26日)

伊藤澄夫(さいたま市岩槻区在住)

丘の上教会の各流派の茶道体験と、講演会・演奏会を満喫できてよかった。春の花見の頃は、高橋先生が茶室を案内くださった。利休七哲の高山右近の研究を続ける傍ら、有田焼・朝日焼など多くの開祖が秀吉による文禄・慶長の役で連れ去られた半島たちの陶工であった歴史も調査され、その後の市民文化講座で講演を聴くこともできた。壱岐・対馬を視察した感想も興味深く、途絶えた『朝鮮通信使』を復活させるため、江戸期の対馬藩家老たちが一計を案じたという話もある。茶道も利休の孫の時代になると、家元が分かれる。

1549年、室町末期に伝わったキリスト教も大きな影響を与え、信長の時代に信徒となる戦国大名も多かったが、秀吉の禁教令に始まり、キリスト信者にはその後明治6年に解かれるまで、過酷な弾圧が続いたのである。

丘の上教会ロビーに掲げられた、キリシタンに対する『定』は、どれほど残酷なことばであったかを感じさせる。もう一つの高札である明治政府の太政官布告

では、キリシタンは邪宗門であることが改めて明記され、明治6年に撤去されるのであるが、それもいかにもぞららしい。

だが今年、長崎と天草地方の、『潜伏キリシタンに関する遺跡』と『朝鮮通信使』がユネスコの世界文化遺産に認められた。

チャリティー茶会は、茶会だけではなく、いろいろな文化を知る機会がある。これからものしみに参加したいと思う。



### 協力会活動報告

協力会活動報告(2017年4月より)

- ・宣教協力会ニュース第8号を発行(12月)
- ・高橋師への支援献金をお願いした
- ・役員会の開催

高橋敏夫主幹伝道者の奉仕教会

大船渡グレースハウス、大船渡聖書バプテスト教会(6月)

その他の活動

軽井沢恵みシャレー主催「茶道とキリスト教」セミナー(10月)

春日部市民文化講座講演(6月、9月、11月)

第21回丘の上チャリティー茶会席主(5月)

### 日本文化宣教協力会 会計報告

自2018年4月1日 ~ 至2011年11月30日

収入の部		支出の部	
前年度繰越残高	16,188円	研修費	259,834円
献金	713,000円	活動費	61,177円
受取利息	1円	駐車場費	138,240円
借入金	138,240円	車両費	206,161円
		通信費	2,268円
		経費・消耗品	137,060円
合計	1,012,359円	合計	804,740円
		残高	207,619円

日本文化宣教協力会ニュースを、今後はEメールにてお届けしたいと考えています。メールでの配信を希望される方は、協力会事務局までお知らせください。

### サポートのお願い

当協力会は、本会の趣旨に賛同する方々の祈りと献金によって支えられ、運営されております。ご支援いただけます方は、同封の振込用紙、または専用の封筒をご利用くださり、お献げいただきたいと存じます。

日本文化宣教協力会事務局

〒344-0067

埼玉県春日部市中央1-5-1-7

春日部福音自由教会内

Tel 048-735-4765/Fax 048-735-4726

Eメール y-gospel@jcom.zaq.ne.jp

郵便振替

ゆうちょ銀行春日部店

口座番号 00140-9-394018

加入者名 日本文化宣教協力会

### 編集後記

主にあって、2019年、明けましておめでとうございます。

日本文化宣教協力会のために、お祈りとご支援をいただき、心から感謝いたします。

高橋敏夫先生は、昨年東北震災の被災地支援に行かれ、その働きが少しずつ北上してまいりました。これまでの働きのほかに、巻頭言に書いておられるように、釜山に渡って小西行長の足跡を巡る旅をしてこられました。日本宣教を妨げている核心に迫るものであったと思います。

私は家内とともに、昨年の秋にイスラエル、ローマ、アッシジの旅をすることができました。アブラハムたちが歩いた荒野をレンタカーで走ったとき、ときどき車を止めて降り立ちました。そして、聖書に出てくる人た

ちは何を考えてこの荒野を旅したのであるのか、と考えました。

翻って、日本に初めて聖書の物語を伝えてくれた人たちは、どんな思いでこの国の道に立ったのかと思います。新しい年は、改元の年ともなります。この国の営みが、天皇制と深く結びついていることを感じます。そのような中で、主の歩まれた道に立ち、この国に福音を伝える者でありたいと願っております。

本年も協力会へのご支援とお祈りを、よろしく願いいたします。ご支援くださる皆さまに、神様の祝福がありますように。

山田 豊

# 日本文化宣教協力会 ニュース

発行:日本文化宣教協力会事務局  
2019年1月12日発行 第9号

Vol.9



## 巻頭言

日本文化宣教協力会

主幹伝道者 高橋敏夫

日本宣教の障害は、他の国には見られない特有のものである。それは、「日本人の心因性傷害」(トラウマ)といえよう。

私は何回か「私は日本人だ」「私にはキリスト教は関係ない」と拒絶された経験をしている。何故キリスト教に一線を引いて無関係を装うのか。それが私の追求してきたテーマである。

日本列島津々浦々に、明治6年まで切支丹邪宗門の高札が掲げられていた。秀吉、家康、徳川幕府はおおよそ300年間、日本からキリスト教を徹底的に排除してきた、という歴史を見つめ直す必要を感じている。

遠藤周作は小説「沈黙」を処女作にしている。それは宣教師が信徒を裏切り、キリストを裏切り、仏教徒に改宗し、それでも神は見捨てられないという弱者に対してあわれみの心を焦点として描いている。

作家遠藤周作は「狐狸庵山人」の雅号でエッセイも書いている。「こりゃあかなわんわー 狐狸庵閑話」のユーモアも表している。そのユーモアとは、ずるくて、弱い自分を見つめる開き直りでもあったであろう。その遠藤周作が「鉄の首枷」で、小西行長を小説に描いている。

何故、小西行長に彼の心は動かされたのか。それは「人間は、みなずるくて、弱い。そのずるい人間を神は見捨ててはおかない。」これが遠藤周作の文学のテーマであろう。

秀吉のキリスト教禁教令のあと、小西行長は面従腹背をもって秀吉の中に飛び込み、キリシタン大名として16万の軍隊を持って朝鮮半島を攻め入っている。石田三成と共に関ヶ原の戦いの後、六条河原で首をはねられた時、行長はキリスト教徒として死を迎え入れている。

釜山、対馬、壱岐、福岡の船の旅はキリシタン大名小西行長に近づこうとする探索の旅でもあった。

行長は宗義智に娘マリヤを嫁がせている。そして、妻マリヤは対馬から追われ、たたりを恐れた島民は彼女の神社を造り、今日もその神社は巖原に存在している。彼女の墓は宗家にはない。それほどまでに対馬でもキリシタンは忌み嫌われ、宗義智は背教している。日本人のキリスト教嫌いは、キリシタン邪宗門の排他性に由来しているといえよう。



今宮 若宮神社(宗義智の妻、マリヤの墓)